〈共訳〉丁玲[1]「暑暇中［夏休み］」（第一―四節）[2]

星野幸代・高媛[補注1]

「あなたの心を取り戻すことはどうしてもできないのね、明朝もう帰ってしまうのね。」

承淑（チョンシュー）はもともと心を決めてこの言葉を口に出したのだが、自分のむせび泣く声が耳に入ると、たまらず胸がしめつけられるようだった。涙を見せまいとハンカチでぐっと拭い、顔を窓の外に向けた。庭には薄赤色や薄青色の服が何枚も乾してある。順児が日陰で小さい腰かけに座って結び目を作っている。承淑は何ごともなかったかのように、服を日光に当ててはいけないとお母さんに言っておいで、と順児に言いつけた。

しゃがんで旅支度を確かめている嘉瑛（ジャーイン）は18、9歳で、顔立ちがなかなかきりっとした感じの良い娘だ。師範学校を卒業し、この自立女学校に来たばかりの時から、忠実で気立てのよい承淑に愛されている。この一年以来、紆余曲折を経てきたが、承淑の真面目さと負けず嫌いな性格のお陰で、嘉瑛は負けを喫した三人の同僚を差し置いて、承淑の愛をしっかりつかんだ。嘉瑛は今回の別れを、自分の前で気落ちしている恋人ほど悲しんではいない。たとえ彼女と一緒に涙を流したことがあったとしても、武陵中学校の演芸会が終わってから帰りたいと考えたことがあったにしても。嘉瑛はそれに、徳珍（ドゥーチェン）の結婚式が終わってから出発すると承諾していた。というのは、彼女が花嫁徳珍の付添人をつとめると約束したから。しかし、休みに入り、美（メイ）姉も帰ると聞いたとたん、嘉瑛は気が変わって一緒に帰ることにしたのだ。家の庭にあるアオギリの木陰で涼むこと、葡萄がそろそろ熟すこと、アワの収穫期に家族が刈り込むさま、夜に弟妹たちと岩の下へコオロギを取りに行くことなどを思い出すと、徳珍の不満や玉子（ユイズ）（嘉瑛が武陵中学校の演芸会で昆曲[3]を歌ってくれないなら自分は踊らないわよと、玉子は言ってきた。しかも、玉子が承諾したのは、朱先生の意に逆らいたくないからなのだ）と承淑たちの別れの涙を無視することを決めた。だから嘉瑛は、承淑が泣いていると知っていながら、知らんぷりをしている。母の意に逆らうことはできないわ、母は手紙で何度も言ってきているのよ、休みに入るとすぐに帰りなさいって、などと適当に返事をしてお茶を濁している。

「そりゃあなたは帰らなければならないでしょうよ！私たちみたいに母のない人をこの古い寺の学校に残せばいいわ。」母の話になると、自らの辛い過去が思い出されて、承

淑は声をあげて泣きたくなる。以前なら、嘉瑛を抱きしめて泣き出すかもしれなかったが、今は彼女に腹を立てているので、そっぽを向いて外の部屋へ走っていった。

もし承淑が嘉瑛の師範三年生の時の恋人のようによく拗ねるタイプならば、嘉瑛はあっさり言いくるめて、すぐに布団を巻きあげて発てばよかったかもしれない。しかし、承淑は表のテーブルの上に突っ伏して自分の運命を悲しむばかりなので、最近やけになりがちな嘉瑛は困ってしまった。嘉瑛は承淑を慰めに表へ出ようと思っても、何を話せばよいやら分からない、承淑が悲しむのも無理はないので、自分でも黙って見るに忍びなく、整理した服を全部まとめてベッドの上に放り出した。弟と妹たちに買ってあげた人形が服と一緒に枕のそばに転がったのを見ると、たまらず腹を立ってきて、「いいから、もう帰らない！帰らないわ！あなたに一生添い遂げるわ！」と彼女は表部屋に向かって大声で言った。

それを聞いた承淑は、狂喜して先の不愉快さはきれいにぬぐい去り、嘉瑛の声からその怒りを察して、自分のために夏休み中の里帰りをあきらめてくれた嘉瑛を慰めようと部屋に入ってきた。しかし、嘉瑛はもう小門から前庭まで走っていってしまった。

前庭と言っても、教室の隅から曲がりこんでいる五尺[4]ぐらいのただの中庭だ。中庭の後ろにある小さい部屋に徳珍と春芝（チュンジー）二人が住んでいる。この時、徳珍は枕カバーにアルファベットを刺繍しており、春芝は窓の前の竹製のベッドの上で眠っていた。

「誰か私と一緒に美姉の所へ行ってくれる？」嘉瑛は入ると大声で叫んだ。

「あなたの承淑は？」徳珍はかつて嘉瑛に好意を持ったことがあった。今はもう結婚間近で、女同士で恋をする気はないが、ただ承淑の話となると徳珍はいつも切なかった。

「また泣いているわ、彼女には降参よ。明日一緒に帰れないから船で待たないようにって、武陵小学校へ行って美姉に教えなきゃ。頼むから、一緒に行ってよ、遠いんだから。私人力車に乗るのが怖いの、道が凸凹で、下手な車夫だと、投げ出されてしまうかもしれないもの。」

「ふうん、使えないわね！すぐ折れるんだから！」徳珍はそう言うと、動こうともせずにあざ笑った。

嘉瑛はばつが悪かったが、今度は寝ている春芝を起こそうとした。

「一緒に行ってもいいけれど、一つ約束をしてくれなきゃ。でなければ、春芝を起こしても無駄よ。明日、明（ミン）兄はマージャンをしたがっているんだけど、春芝は行きたがらないの、あなたが行ってくれるなら、今日は付き合うわ。春芝も起こしてよ、三人のほうが楽しいからじゃないわ、お互い無駄な焼きもちを焼かないようにね、今はそんな面倒は極力避けたいから。」

嘉瑛はもちろん笑って承知した。

夕食の時、三人は大小の荷物を抱えて、よろよろしながらやっと帰ってきた。荷物は

徳珍のものがほとんどで、嘉瑛も「花籃」ブランドの白粉（おしろい）１ケースと、小さくて精巧な鼈甲（べっこう）の扇子２本を買った。一本は自分用で、もう一本は承淑にあげるためだ。嘉瑛は承淑が入浴し終わるのを待ちきれず、「淑姉、淑姉、いいものを買ってきたわ、早く見にいらっしゃい」と窓ごしに話かけた。

向かいの部屋の志清（ジーチン）は、すでに仲直りしたこのカップルを見て、「また帰らないの？」と笑いながらからかい半分に言った。

「帰らないわ」と嘉瑛は承淑の肩にもたれかかり、承淑が扇子であおぐ風ではたいたばかりの天花粉のいい香りを、目を細めてしみじみと味わっている。

承淑も二三日泣き続けた疲れを忘れ、扇子であおぎながら、膝の上の小さな手をやさしくなで、「帰らないのよ！彼女は帰らないことにしたのよ！」と、心の中で何度も嬉しげに繰り返した。

二

しかし、承淑は自分の思うほど満足したのだろうか。いや、翌日彼女はまた一人で竹蓆（むしろ）を敷いたベッドに横たわってすすり泣いた。この悲しみは彼女自身にも分析のできないものだ。それは必ずしも、この寂しさを怖がる自分の気持ちが嘉瑛には分からないからではない。気遣って、帰らないことにしてくれたので、かえって自分の孤独な影に気づいて承淑は泣きたくなったのだ。もし嘉瑛が徳珍と一緒に朝早く出かけてしまい、午後になってもまだ帰らないことがなかったら、承淑は心静かに学校に閉じこもって、買ってきたばかりの恋愛小説を読んだり、嘉瑛のスカートに花を刺繍してあげたりしていたはずだ……しかし、今彼女は過去の楽しい思い出と嘉瑛を失ってからの恐ろしい生活で頭がいっぱいだ。自らの寂しく全く頼りのない運命をぼんやりと眺め、すべてに失望し、たった今死にたい、そうすれば将来嘉瑛が何人と付き合っても、少なくとも彼女の心に深い印象を残すでしょうからと承淑は思う。そう思うと心が締め付けられ、思わず涙がこぼれる。

順児（シュンアル）は泣き声を聞きつけ、部屋の門口まで来てつま先立ちして中をのぞく。部屋は静かで、帳が垂れ下がっているが、泣き声が帳の中からもれてくる。そこで順児は自分の部屋へ走り戻って、母に教えた。しかし、田（テエン）おばさんはフンと鼻を鳴らしただけで、服をポンポンと畳み続ける。ここの嬢さんたちが泣くのは、ここで働き始めたばかりのころは不思議に思ったものだが、一種の病気だねと田おばさんは思う、御嬢さんたちは普段は陽気な人に見えるのに。日にちがたつと、他人の心配やら慰めなんか全く意味がないと田おばさんは気づいた。ただそんなふうに騒ぐのが好きなだけさ。誰かがかまうと、泣き声の第二段階を加速してしまうかもしれない。

ちょっと失望した順児は、出かけなかった志清の部屋に抜き足差し足近づいた。志清

は毛糸の靴下をほどいている。

「先生、先生！……」

志清は古顔気取りで彼女のほうをちらっと見た。もうすぐ二年生になるのだから、もっと落ちつきなさいよ、と志清は言う。

不愉快なお説教をされた順児は、何のために来たかをも忘れ、むっつりと膨れっ面をしながら一人で前庭にある教室へ向かった。

実は志清には承淑の泣き声が聞こえていたし、何のために泣いたかも知っている。彼女は照れ隠しをするように独り言を言った。「田おばさんに、嘉瑛を追いかけて連れ帰ってもらおう。」あの泣き声には耐えられないかもしれない、しかも少し慰めてあげるのも人情だし。そこで志清はほぐした毛糸をちゃんとまとめてから、真ん中の部屋を通り、承淑たちの部屋に入った。慰めの常套句をたくさんならべ、蚊帳をつって、額の汗と涙を拭いてやり、タオルを絞って、温かいお茶を入れて、団扇で扇いでやった。そうなると承淑はこれ以上むげに泣いてもおれず、顔をあげ、もう悲しくないかの様に世間話をする。そして、永遠に友達［女性の恋人］が一人もできない志清のことを思うと、承淑は自分が泣いたことさえも誇らしくなり、かえって親切に志清と話すのだった。志清の方はこの思いがけない同情には気づかず、承淑に自分の言った聞こえのよい言葉が効いたのだと思い、調子に乗って、嘉瑛は大人気（おとなげ）ないと批評し、また母校の不正な気風を批判する。もともとどんなににちゃんとした人であっても、武陵女子師範に入って二カ月も経つと、家庭や他の学校では三年間かかっても学べない教科書以外の知識を学べる。何のために学校に入ったかを忘れ、一日中キスして、抱きしめ合い、手紙を書いてこそこそ人のベッドに置くことなどに夢中になる。また、恨みや涙、更に見苦しくちょっかいを出すことまですべてマスターする。可笑しくない？女の子と女の子の間に決闘があるのよ。ただの言い争いだけではなく、時には手まで出すのだから。

承淑は自分を弁護する言葉が見つからず、それにこの意見にも一部正しいところがあると思う。母校の乱れた状況、また七、八年以来付き合ってきたいわゆる友達から得た喜びと悩みを思うと、いったい何を習ったのかしら？何種類ものよく分からない科学的知識、簡単な文法しかできない外国語。国文と言えば、更に見通しがつかない、どうすれば上手になれるかさっぱり分からない……だから、黙ってうつむいた。

これは志清にすべてを忘れさせた。師範学校の時何回も失敗したこと、人を憎んだことがあること、独り寝を悲しんだことなどをすべて忘れてしまい、厳かに滔々と議論を続け、承淑に尋ねた。

「あんたはまだ独身主義を守り続けたいの？」

承淑はうなずいた。

そして彼女は、この名詞のため、犠牲になろうと誓ったかつての、或いは新しい学友

を嘲笑した。ある人は両親の命どおり、気にそわない農家に嫁いだ。ある人は将校の妾に送り込まれた。ある人は妥協し、自分の運命を友達に任せ、結婚相手を紹介してもらって自分を片づけた。残りは、まだこの旗印を擁護し、女友だちを抱き締め、お互いに不まじめな目線を注ぎ、新婚夫婦気どりだ。

こうした大勢のことを嘲り皮肉る憤慨の言葉を聞いて、承淑は思わず顔を赤らめて、心の中で思った。「私に面と向かって罵っているじゃないの」。でも表向きは穏やかに「じゃあ、あなたは？」と聞いた。

「私こそ真の独身主義者よ」。この言葉を口にすると、志清はもっと誇らし気になった。すべては取りに足らないもので、どんな感情も可笑しいという風に。

「お金は？」この言葉は承淑が心の中で発した言葉だ。承淑は相手を不機嫌にさせそうな議論は避け、わざと話題を変えた。興奮しすぎて目が血走った志清の顔を見たくないからだ。志清も彼女に合わせて話を変えた。

この自立女学校の教員たちの中では、承淑は子供の時からの苦労とよく泣いたために皺のよった瞼のせいで、その容姿は嘉瑛、玉子、徳珍……たちの可愛らしさに及ばない。しかし、性格の面で言えば、彼女だけそれほど軽佻浮薄ではないし、辛辣でもない。だから、他人から色々されたり言われたりしても、じっと抑えて耐え忍んでいる。人とぶつかるのが嫌いで、人を傷つけると自分も傷ついたように悲しく感じるから、志清に仕返しするような言葉を口に出さず、心の中で一回思うだけで復讐したことにして、もうそのことで悩まない。もし他の人だったら、志清の心にナイフで刺されたように忘れられない傷を残したかもしれない。これは本当のことだが、毎月の給料がたった16元しかもらえないのに、志清はこっそりたくさん貯めこんでいる。信じられないほどケチなので、若い同僚たちに貯金のことを知られてしまい、しかも詳細に調べられてしまった。何曜日に志清がどの町で徴収した各口の利子、元金はいくらか、利率はいくらか、利子を集めてまたどこに金貸しをしているか、といったことまで。そうした面々は、志清と同じか或いは４元か６元多く給料をもらっているにもかかわらず、金遣いが荒くて、貯金が全くない。だから、靴下さえもろくに買わずにお金を貯めている人はよく嘲笑される。嫌でも仕方がない、みなこの話を冗談にしているからだ。皆でおしゃべりをする時、志清はお金に関する話題にならないように心がけている。お金の話が出ると、彼女はそっぽを向いて自分の部屋に戻る。その気持ちは分からないわけではないが、しかし、皆ついつい志清を怒らせたくなるのだ。

三

天気は日に日に暑くなって、もうすぐ夏休みに入る頃よりも暑い。この辺鄙な武陵城は、暑くなると全くたまらない。木も少ないし、広場も少ないし、家にびっしりと囲ま

れている狭い町だ。朝早くから、涼しいうちに町の外の川まで行って水を運ぶ料理人が町中にいっぱいだ。井戸のある通りには肌脱ぎになった人たちと旧い水桶が溢れる。街の岩盤には、粗い草鞋の湿った足跡がつく。しばらくすると、田舎から来た野菜売りの天秤棒がぎっしりと通りの両側に並ぶ。街で物を売り歩いているのは夜が明けてから家を出てきた人たちで、肩に担いでいる天秤棒を下ろす場所がもうなくなってしまったため、仕方がなく一軒ずつ呼び売りをしているのだ。濡れた岩板に彼らの靴についた田舎の黄土が加わって、ヘドロになる。太陽の影が壁から落ちるころ、街はかえって静かになった。面倒を見る人がいない上半身裸の子供たちのほかに、町中には一、二人の通行人しかおらず、団扇であおいで、身をかわして日陰の涼しい場所を歩く。また、拍子木を叩いて冷やし麺や冷やしビーフンを売る人、ドラを叩いてパパイヤの種を売る人、つば広の帽子をかぶってスイカを売る人やらで、賑やかになるのは、日暮れの後だ。家々の庭は小さく、家族の多いところは竹製のベッドを入り口の外に置き、大人も子供も気持ちよさそうにその上に横になったり、座ったりして、近所の人と天気の話をする。夕飯をここで食べる家もある。しゃれた邸宅に住んでいる坊ちゃんたちも、寝椅子を入り口まで運んできて仲間を入れてもらおうとする。通りの人を眺めるのが好きな主婦たちが戸口に立つものだから、通りの人も多くなる。その他に、親友の訪問、親戚のおめでたや不幸、仕事のいざこざやら商いの取り立てを、夕方涼しいうちに急いで済ませたい人も少なくない。大多数は夏用の長衣を着て小ざっぱりと洗った手足の青年たちや、休みに入ってもまだ寮に住んでいる白い制服を着た中学生、また人に疎まれている汚れた灰色の服を着た兵士たちだ。そんな時、淡い色のスカートをはいて、断髪の女性たちが表れようものなら、街中の目を引き付ける。いくらこの街に女子教員が何人か住んでいて、しかも彼女たちとこの何年かで親しくなっていたとしても、街の人々は短いスカート姿が現れると、思わず、他人に合図しながら、女性がきまり悪くなるような目線を送る。こんな夏の夜に、繁華街で見世物になりたくない人たちも足を休める。

自立女学校は小さく旧い寺を改築したものだ。本殿を講堂にされ、残りはあまりろっていない大きくない偏房[5]が教室と教員の寝室にされた。部屋は旧いが天井が低くはないので、その講堂は周辺のもっと小さい狭い学校の羨望の的だ。近くの雑貨店に駐留している兵士たちも、このとてもひんやりとした講堂を羨ましがり、一、二小隊の人をここに移したがっていた。家に帰らないでここに居残っている数名は、朝ごはんを済ませると、思い思いに竹の寝台と寝椅子などを講堂の隅まで運んできて、そして故郷のめったにない見聞や、近隣の他愛のないことをおしゃべりして、そして以前か最近読んだ上海のくだらない雑誌に載っていたどこかの学生やお嬢さんの話をして、興味津々で暑さも忘れる。昼になると、田おばさんが台所の水がめで数日冷やしてあったスイカを切り分け、お盆に載せて彼女たちが囲んでいる床机まで持ってきたので、話題はスイ

カに変わった。中の何人は屋台で買ってきたトランプで勝負している、跑和やら、窖牌やら……とっくに時代遅れなのだが、今は武陵の紳士たちによって復活し流行っているものだ。しまいに夕飯を済ませると、またすべてのものを庭まで運んで行って、星の光、月の光の下で、相変わらず狭い範囲からはみでることのない日常の雑事ばかりしゃべり、言い飽きても繰り返して言うばかり、聞き飽きても、我慢して聞くばかり。睡魔がやって来るとまぶたが重くなり、それぞれの竹の寝台から低くこもったいびきが響いてくるのだった。夜が深まると、露の玉で目が覚めた一人が他の人を起こして、朦朧としながら「蚊がひどいわ」とか、「もう遅いわ」などと言いつつ、各自部屋に戻ると蒸籠（せいろ）のように蒸し暑いのだが、もう気にもせず、横になるとすぐに熟睡する。

ところで、このような生活をしている数人は、各自違う考えを持っている。特に、三日間も出かけていない徳珍だ。出かけない理由は、暑いからと言ってみたり、春芝のそばから離れたくないからというそぶりも見せる。実は明兄からずっと離れているからだ。明兄は彼女が日射病になるといけないからと、彼女を出かけさせない。それに、帰省しないように、自分の所にあまり親しくない同郷人が来ているとわざわざ彼女に手紙を出した。これが嘘だと徳珍は知らないで、その客（同郷人）のことを心の中で嫌っている。一日中、誰かとお茶を濁している苦しみは彼女自身にしか分からないが、その苦しみは将来明兄に埋め合わせさせるつもりだ。

しかし、四日目の朝早く、徳珍はやはり遊びに出かけるときよく着る薄紫色の麻紗[6]のワンピースを着て、そして北京から買ってきてもらったつばの広い麦辮帽[7]をかぶって、帽子の上には特大で桃色の緞子の花が付いていおり、念いりにおしゃれしたのに、怒ったような顔して騒ぎたてながら急いで出かけた。それは昨夜つまらないことで春芝と喧嘩したからだ。徳珍は最初我慢していたが、とうとう怒り出した。春芝は更に譲らず、まるで人にいじめられたというふうに、わざと言葉で復讐しようとする。だから徳珍は朝ごはんも待たずに、夜が明けるとすぐに出かけ、春芝の機嫌をさらに損ねた。実は明兄と知り合ったばかりのころ、徳珍は春芝からの嫌味や不満やら禁止令などをじっと我慢していたが、春芝の止まるところを知らない干渉が、逆に徳珍の心を明兄のほうに傾かせた。徳珍はしだいに春芝の溜息に嫌気がさし、このもめごとが悩ましくなってきた。この歴史ある習慣が名残惜しくなければ、ずっと前に仲たがいしていたわ。春芝は徳珍のことを憎んでも、絶対に彼女を明兄と仲直りさせるものかと思い、一縷の望みをかけて泣いたりわめいたりするが、それは旧情を取り戻そうとする武器でしかない。だから、互いに不愉快な関係は、ずるずる続いたまま解決を待っている。

嘉瑛たちは徳珍が怒って行ってしまったと聞いて、前庭まで来た。春芝は最初は泣いて訴え、涙を拭いながらかすれた声で、かつて二人が枕もとで誓った言葉までも言い出した。それは彼女が信用ならない人間だという証明だ。そばで聞いている人たちは、そ

の震える声と涙でどちらが悪いか判定するしかない。この判定は春芝から見れば公平なので、彼女は泣きやみ、手紙を一通テーブルの上に置いて出かけた。

春芝がその場を立ち去ったとたん、その手紙は彼女に同情した人々にあっさり公開されてしまった。皆は興奮して読上げた。

「愛する人！－これは最後なれど､かくのごとく呼ばせたまえ…」 嘉瑛は軽薄な調子で「愛する人」と大声で叫んだ。志清までも笑い、つづけて読んでいった。

「あなたが帰って来たとき――最近買った嫁入り道具と大切な宝物を取りにもう一度帰って来るでしょう――驚かないで、私はもういないわ。もう二度と会わないでちょうだい！もう二度と今愛している人を捨てないでちょうだい！（もちろん、これは私と比べものにならないわ！）あなたたちは早く結婚して、色白でぽちゃぽちゃした子どもを産んで、あなたと付き合う友達は私のように不運な目に遭わないようにと願うわ。」

「もともといろいろ話したいことがあったけれど、話したら反って不愉快にさせてしまうと思うの、あなたに迷惑をかけないように、‘希望’と記すだけにするわ。私たちの過去を、あなたは自然と忘れてしまうのでしょうから、私も二度と思いだしたくないわ。」

手紙を読む声が不意に止まった。

「それでもう終わり？」床の筵に座っている承淑が聞いた。がっかりしたようすで、承淑の理想とする手紙は、こんなに簡単な内容であるべきではないのだ。

「まだあるわよ」嘉瑛が大笑いしているので、志清は代わりに署名を読み上げた。

「あなたが初めてキスした人より！」

「へぇ－！春芝たら、バカね！こんなこと書いたら、あの第三者に笑いの種にされるじゃない？」

承淑は、春芝と徳珍を仲直りさせて、もう騒ぎを起こさせないようにしましょうよ、皆に知られたらよくないから、と提案した。

しかし志清は、それは余計なことよ、他人はこんな「内輪もめ」に口を挟む必要はない、徳珍が探しに行かなくても、春芝はきっと帰ってくる、あの人は自分から一人で寂しい生活を送る勇気などないもの、と主張した。

果たして、みなの思いもよらないほど一瞬で、春芝と徳珍は仲直りした。二人は少しも悪びれずに、人前でごく自然に一つの茶碗から麺を食べるのだった。

四

賛美すべき暴雨の翌日、武陵中学校の演芸会の幕が上がった。もともとこの演芸会をもって華々しく休みに入るはずだったのだが、暑さのために延ばされた。延期されたために、反っておもしろい出し物が増えた。上大人の「新補缸」は新しく入れられた演目

だが、準備中の何人かの教員と学生に評価されているようだ。その上、「恨海」を演じるベテランの役者が夏休みで省都から帰ってきた。

舞台は厚い板を不揃いな短い柱で支えたもので、傾き加減に露天の芝生の一角に作ってある。昼間、年少の生徒たちはそのぐらぐらする舞台の上で滑稽ダンスや[8]、国技や[9]、手品の練習をして、床板が振動で太鼓をたたくようにドンドンドンと鳴るのが、音楽の代わりになった。何回も洗われてだいぶ旧くなった青い布二枚が幕替わりで、あまり重みを支えられない鉄線の上を引っ張られて行ったり来たりする。銅製の輪が鉄線の上を滑るカンカンという小さな音さえ、演芸会を間近に騒いでいる学生たちにおもしろく感じられる。生徒の第一群が飽きると、もう一団がやって来るので、この舞台は朝設営されてからずっとにぎやかだ。

申し分のないお天気だ。かすかな陽光が差している。風は湿り気を帯びていて、ひとえの服を着ても暑くはない。こんないいお天気は、朝晩のごはんを済ませて、もうすることのない人たちにとって好都合だ。日の入りまでも待てず、まるでどこかの田舎で地方劇が上演されるときのように、てんでに手をつなぎ、子供をおぶったり抱いたりしてやって来た。大部分は学生の親族で、入場券を高く掲げている。遅れるといい席をとれないかと心配だから、三時間も早く連れだって家を出たのだ。なのに、結局いい席を取れなかった。一番前には、とっくにティー・テーブルや椅子などがたくさん並べてあり、それは地元の地方官、役所の科長、兵営の職員と指揮刀を提げた長官たちのために用意されているのだ。左側は役人たちの奥さん、お嬢さんたちの席だ。右側に並べられている長い腰掛は、各学校の教職員用だ。その人たちは、真っ赤な封筒入りの金泥で書かれた招待状を学校側が送って招請した、地元の上流階級の人物だ。麻ひもで区切られた後列は、もっと早くから来た本学と別の学校の中学生たちが陣取っている。熱心な観客たちはぶつくさ言いながら、やむなく舞台から遠い席に座った。もっと遅く来た人たちは、更に自分の席が不満で、しばしば一番前へ割り込もうとしては、他の人に阻まれた。男性客のほうは、みな長衫[10]を着たかなり上品そうな中年の人たちだ。ふだんと異なって、込んでいる会場に来て暑さに耐えている。おそらく若者たちと同じように、女性教員たちの新奇な化粧とダンスを見に来たかったのだ。評判の趙女史の京劇の節回しは噂どおり上手かどうか、みな自分の耳で聴いてみたいのだ。女性席には、スカート姿でジャスミンかシュンランを差した人が少なくない。男性席の三倍もかしましく、誰もがおしゃべり上手で、知り合いでも知らない人でも、低い声でおしゃべりする人が誰もいない。いわゆる二簧[11]とはこうですわ、いわゆる文明劇とは、いわゆる昆曲とは、いわゆるダンスとは……ある女性教員のアクセサリーの美しさとか、婚姻についてとか、秘密のこまごました事にまで、全部しゃべりたてている。でも、このような人たちから聞いた話は、すでに事実に合わないストーリーだ。

会場で人々の話題にのぼる、注目の的の女性教員たちも、朝早くにぎやかに自立学校に集まってきた。

この日、空が白み始めたころ、泮池に駐留している兵士が城壁の上に立ち、耳をつんざくような音で、もう目が覚めている嘉瑛に起床ラッパを吹いてくれた。

「まだ早いわ。」嘉瑛の起きる音を聞きつけた承淑は、もうちょっと目を閉じて、しばらく休んでいようと勧めたが、自分自身が目が覚めたばかりのようには見えなかった。

「淑姉さん！私はまったく眠れなかったわ。」

「起きてもすることもないし、もっと不安になるわ。もうちょっと寝てなさいよ、私は静かにしているから。じゃないと一日中まぶたが腫れぼったいわよ。」

嘉瑛はしかたなく目を閉じたが、心は依然として細かいことばかり浮かんできて、何とも落ち着かなかった。『遊園』、『驚夢』はすでに習熟しており、娟（ジュアン）娟（ジュアン）の笛もついていける。あの淡い水色の洋風に仕立てた長衣にも非常に満足している。特に承淑が自分で縫いつけた二輪の人工ダイヤモンド製の花がガス燈の下で輝くと、きっと映えるだろう。ただ髪は困ったわ、玉子が太い鉄ゴテで巻き毛にして、模様のある緞子のリボンを結ぶなんて、自分は踊らないくせに派手すぎる。観客はというと、たくさん来てほしいのか来てほしくないのか、嘉瑛は自分でも分からない。もちろん人があまりにも少なかったらがっかりするけれど、人の頭がひしめいているのを見たらドキドキして声が出なくなり、面目を失うのも嫌だわ。でもそこまでにはならないわ、普段の授業で、授業参観や視察に来る人も少なくないけれど、平気で学生といっしょに歌っているじゃない。ただ、歌っている最中、咳が出たら困ってしまうけれど……それで、彼女は咳ばらいをしてみた。

咳の音を聞きつけた承淑がやってきて、田おばさんにお湯をもらいに行った。承淑は引き出しに昨日買った砂糖が少ししか残っていないのを見ると、砂糖を買い忘れないようにと言いつけた。承淑が幼い頃知った常識によれば、砂糖水は肺を潤し、飲めば咳き止めになるのだ。だから、嘉瑛も試してみて。

必要なものはすべて準備でき、もう八時になったが、嘉瑛はこのときまでずっと目が覚めたまま横になっていた。志清の部屋に泊まった梁玉嵐と趙少芳も目をさまし、ベッドに横になって、隣の志清と雑談している。しばらくして、趙少芳は声を調整して『汾河湾』を歌いはじめた。嘉瑛は半分役人口調で「いいぞ！」と大声で叫んだ。

劇は中断され、しばらく爆笑が続いて、また澄みきった心地良いせりふ回しが聞こえてきた。

「お嬢様、どうぞ起きて下さいませ。」

両側の部屋とも大笑いになり、部屋越しに大声で答えて、一緒に起床した。嘉瑛は自分の買ってきた卵を三つ持っていき、全部趙少芳一人にあげた。彼女も夜舞台に上がる

が、卵はのどに良いそうだからだ。

数人が忙しく化粧石けんで顔を洗っている間、玉子と娟娟が人力車に乗って娟娟の家からやって来た。ドアを開けると田おばさんが急いで大声で知らせ、順児もあわてて先生に挨拶して、礼をする。徳珍は短く赤い肌着を着たままで、部屋の入り口まで来て、

「あら、まあ！まるで狐の化け物のようにおめかししているわ」と騒ぐ。

やって来た二人が彼女の部屋に入ってきて、春芝も騒いでいる。

裏庭からからかう声が伝わってきて、それはまったく遠慮のない調子だった。というのは彼女たちは師範学校時代のクラスメートで、小学校の時からずっと仲良くしているからだ。

「早く入ってきて見せてよ、玉（ユイ）ちゃん！」

梁玉嵐（リァンユイラン）がすでに前庭まで来ていたので、数人が笑って部屋の奥へ入っていった。

徳珍は走って行って衣装箱を開け、新しく縫った数着の仕立ての良い服を見ながらも、どれを着たものやら分からない。がっかりして、さっきの二人の姿が目の前にきらめいている。

「まるで妖怪のようだわ、上から下まで色とりどりで、あんなのがきれいだと思う？」春芝はこんな言葉で彼女を慰めようとした。徳珍の一瞬の沈黙から、彼女の気持ちがよく分かったからだ。

裏庭でも、あの御揃いのような服を算段しているところだ。どちらも上海でとても流行っているデザインをまねたはずなのだが、地元の洋服屋では省都の別嬪さんが着ているような服を作るのがせいぜいだ。短い上着に長いスカートをあしらって、全身に縁かざりや、玉やたくさんのまぶしいものが嵌められている。彼女たちは薄いピンク色のストッキングに青い柄の緞子の靴を履いている。この二人を見た志清も思った。「あの二人は、なぜ花嫁みたいに着飾って街に繰り出したのかしら。人の見世物になって、恥ずかしくないの？自分で見てごらんなさい、頬紅をつけすぎよ！」

趙少芳も、歩いてきたの、それとも人力車に乗ってきたのとたずねた。人力車に乗ってきたと聞くと、

「この二人が乗って、人力車夫が道中大声で呼び声をあげながら、狭い町をゆっくりゆらゆら走ってきたら、両側の店のカウンターにきっと大勢の人がのりだして、ぽかんと眺めていたでしょうね。……こんなにめかし込んで、まるで町を練り歩くミス観音だわ」と笑った。

馬鹿にされている玉子と娟娟二人は怒りもせず、からかう言葉は無視し、ほめる言葉しか耳に入らないようで、心から楽しそうにこにこしていた。少しも不愉快に思うことなく、口の中で何か言いながら、嘲笑している人の群れから抜け出した。

承淑も、こんな飾り立てるなんていけないわ、教員らしくもないと言った。しかし、

自分が嘉瑛の衣装のために一生懸命新機軸を打ち出そうとしたことを彼女はすっかり忘れた。

嘉瑛は、玉子たちのカールした髪の毛ばかり目についてしまう。ごわごわで乱れている、まねしなくてよかったと嘉瑛は思いながら、自分の柔らかくてなめらかな髪にしきりと触ってみる。

［第四節未完］

---

[1] 丁玲（1904-1986）は中国20世紀を代表する作家の一人。1920年代、近代的女性の心理を描く作家として一世を風靡したが、30年代から「革命文学」を目指す。建国後、反右派闘争から文化大革命にかけて断続的に迫害された。79年に作家として復帰、自伝的回想を主とする晩年の執筆は国内外で高く評価されている。（丁玲『丁玲自伝　中国革命を生きた女性作家の回想』田畑佐和子訳、東方書店2004、「解説」参照）

[2] 本作は初め1928年に執筆、日本では初訳。本翻訳の底本は丁玲『在黒暗中』（人民文学出版社、2000）80-118頁。

丁玲作品は1950年代に岡崎俊夫訳『霞村にいた時』（岩波文庫1956）等単行本が複数出版され、中国作家短編集にはほぼ必ず一、二篇収録されていた。空白期を経て、最近の単行本としては前掲注１『丁玲自伝』があり、短編が『中国現代文学珠玉選』（丸山昇・芦田肇・佐治俊彦・白水紀子編、二玄社2000。１、３巻に採録）に収録されている。

[3]「昆腔」を用いて歌われる地方劇。

[4] 長さの単位で、三分の一メートル。

[5] 四合院式の建物で母屋の左右両側の棟。

[6] 綿または綿と麻混紡の薄手の布。

[7] 麦わら帽子を作るために、麦わらを平打ちに編んだもの。

[8] 上海・杭州・蘇州で行われる民間芸能で、漫才に似たもの。

[9] 国技とは、国の伝統文化を代表する技術を指す。中国の国技は、武術、漢方医及び料理のことである。ここでは演芸会の出し物であるから、武術を指すと思われる。

[10] 単衣で丈が裾まである男性用中国服。

[11] 伝統劇で歌う節回しの一種。

[補注1] 南京郵電大学専任講師。なお本稿の責任は全て星野が負うものである。